

「ボディ・ハント」 ★★★

2012 (平成24) 年11月24日鑑賞

<シネ・リーブル梅田>

監督：マーク・トンデライ

脚本：デヴィッド・ルーカ

原案：ジョナサン・モストウ

エリッサ (17歳の女子高校生) / ジェニファー・ローレンス

サラ (エリッサの母親) / エリザベス・シュー

ライアン (一人暮らしの青年) / マックス・シエリオット

2012年・アメリカ映画・101分

配給/ポニーキャニオン

◆ 『ウィンターズ・ボーン』(10年)でアカデミー賞主演女優賞にノミネートされ、大人びた演技を見せ(『シネマルーム27』59頁参照)、『ハンガー・ゲーム』(12年)でド派手な主役に抜擢された(『シネマルーム29』234頁参照)ジェニファー・ローレンスの主演最新作ともなれば、こりゃ必見!しかも、タイトルが『ボディ・ハント』と思わせぶりなら、チラシを見れば「それは、彼女の肉体を狙っていた・・・」とこれも思わせぶり。しかも、チラシにはタンクトップ姿でナイスボディを見せる彼女の姿が・・・。

他方、「全米震撼!絶叫ノンストップ!彼女に何が起こったのか!?!」「隣の家で飼われていた“ある秘密”、美少女を狙う、邪悪な欲望の正体とは!?!」といううたい文句はどうもイマイチ。まして「お願いします。衝撃の結末は、決して誰にも話さないでください」は、今やかえって逆効果・・・?

◆ 本作は郊外の一軒家の中で、不気味な少女の手によって両親が惨殺されるといういかにもホラー映画っぽい導入部で始まる。それから4年後。離婚をきっかけにシカゴから母親のサラ(エリザベス・シュー)と女子高校生の娘エリッサ(ジェニファー・ローレンス)がその隣の家に引っ越してきた。賃料が格安の大邸宅は魅力だが、その日の夜ふと外を見ると、隣家の窓にも明かりが。あれ、隣は空家じゃなかったの・・・?

近所の人たちの食事会に出席したサラ、エリッサ母娘はさんざん、隣の屋敷に一人で住んでいる、両親を妹の手によって殺されたライアン(マックス・シエリオット)の悪口を聞かされた。しかし、ハイスクール生活が過ぎていく中で、近所の人たちやそのご子息こそ俗物ばかりで、逆にライアンの方が心がピュア。お年頃のエリッサはそんな風を感じ始め、ライアンに恋心すら抱き始めたようだから、こりゃちょっとヤバイ?しかして、それを感じとった母親は・・・?

◆ 本作のポイントは、ライアンがエリッサに語って聞かせるある昔話。ライアンとキャリー・アンは仲の良い兄妹だったが、妹の大好きなブランコで一緒に遊んでいる時、ライアンが手を離れた隙にキャリー・アンは転落し、以降頭がヘンに。したがって、そんな妹の手による両親の死も妹の死も、すべてボクのせい。エリッサの母親の分析によると、エリッサはいつも誰か一番不幸な人を手助けするために動く性格らしいから、そんな告白を聞くとエリッサは・・・。

ところが、途中から本作は状況が一変していく。監禁モノはそれなりに面白いものが多いが、さてライアンが地下室に飼っていた(?)あるものとは?また、ある日大胆にもライアンの留守中に一人でライアンの家に入り込んだエリッサが、地下室で見たものとは?

◆ 私の分析ではエリッサがライアンに魅かれていった理由は次の4つ。すなわち、①田舎住まいになったため、基本的に男が少ない。②家の近くのお金持ちのお坊ちゃまは、幼稚でバカばかり。③何かと厳格な母親のサラから「この男はダメ」と言われると、そんな母親への反発から余計その男に魅かれていく。④何よりも、エリッサ自身に男を見る目がない。

ある日、ライアンの家の中でエリッサが積極的に仕掛けていき、いいムードになったのに、何かに驚いたライアンが急にエリッサを放り出して飛び出していったのは一体なぜ?そんな疑問がわいてくると、余計ライアンへの関心が強まっていくのは女心の常・・・?

◆ そんなワケで次第にエリッサは危機的状況に陥っていくわけだが、本作後半では一躍タフガールに変身し、トコトン闘うエリッサの姿に注目!本作では映画冒頭からタンクトップ姿のエリッサの胸の谷間が目立つが、それはタフガールに変身した後半も一貫している。警察官が簡単に殺されてしまったり、殺されたと思ったサラがいつの間にか復活して(?)エリッサを手助けしたり、と後半のストーリー展開には違和感があるが、まあ本作はエリッサの奮闘振りに免じて星3つに。なお、本作最後に見せるオチ(?)にはきつと賛否両論あるはずだが、私はどちらかというところ否定派。